

幾田桃子氏・千々松由貴氏ディスカッション形式講演会 第2弾

「働く—ジェンダーと重圧・社会進出について—」

開催日時：2024年11月26日（火）13:30-15:00

会場：龍谷大学大宮学舎 西翼2階大会議室

参加者人数：24人

講演者 幾田 桃子氏

千々松 由貴氏

司 会 水尾 文子氏

プログラム

登壇者自己紹介

ディスカッションテーマについての趣旨説明

ディスカッション

【報告のポイント】

デザイナー、社会活動家、教育者、芸術家として国内外の様々な場で活躍されている幾田桃子氏と千々松由貴氏が、「働く」ことについてジェンダーの観点から本学の学生とディスカッションを行った。

【概要】

ディスカッションを始めるにあたって、冒頭で幾田桃子氏から労働の歴史や現代の状況確認が行われた。

人間は睡眠以外の多くの時間を労働に費やしている。睡眠と労働は人類共通の大切な行為であり、人間は酸素・水・食物・睡眠があれば生きていけるが、では、人間はなんのために働くのか、と幾田氏は会場に投げかけた。その上で、公私ともにパートナーである幾田氏と千々松由貴氏は、働く上で「平等」「成長」「社会貢献」を大切なキーワードとしていることが紹介された。両氏は、現在の労働のあり方に捉われず、思考を自由にして、理想的な働き方についてディスカッションを行いたいと今回の趣旨を説明した。



ディスカッションの様子 中央左が千々松氏、中央右が幾田氏

まず、幾田氏は、「女性社長」の割合が日本においては全体の15%という統計をあげて、自身が実際に体験した「女性社長」に対する他者の反応を語った。それをふまえて、会場に「働くなかで感じたジェンダーバイアス」について問いかけた。

社会人経験のある学生は、当時勤務していた上司に反対意見を唱えたところ、上司に呼び出され「お前もう〇〇歳だろう」と年齢をあげられて叱責された体験を語った。その学生は、上司の言葉には「男子たるもの〇〇歳を過ぎてなにをやっているんだ」という意味が含まれており、自身が女性であったらこのような発言はされなかったのではないかと述べた。これに対して幾田氏は、プロジェクトでかかわった他企業の男性社員から、出世のことを考えると「わからない」「知らない」と言いづらい、という声があったことを紹介した。「大人だから、男性だから」という捉われに起因するのだろう。その学生は、「給料をもらって働いている」ことを考えて、その場は上司に反論したい衝動を抑えたというが、幾田氏は、会場に向けて「働くということは、お金をいただくことであると考えてほしい」と投げかけた。ここで、なぜ「お金」が必要なのか、という問いが生まれる。

幾田氏は、現在、人間は一日24時間の三分の一を労働に使用していることから、「働くことは生きることだといえる」と述べた。そこで、「最高の快樂主義」という価値観を両氏が共有していることが述べられた。「最高の快樂主義」とは、「効率的に社会に貢献できながら、お互いが楽しくて、まわりも楽しくて、地球も世界もみんないい方向に」という意味であり、自分たちのみならず、周囲の人も楽しくなってほしいという。幾田氏は、「生きる」ということに限定すれば、睡眠も無料であり、水も公園で得られるため、食べることを解決すればそこまで金銭は必要としないが、社会生活をおくるうえで必要な資金(学費等)や交際費が存在すると説明した。そこで、幾田氏は「理想的な働き方とはなにか」と会場に問いかけて、「いまある当たり前を絶対に当たり前とは考えないでください」と強調した。千々松氏は、単に「働く」というと、金銭をつくるのが資本主義社会で生きていく上で重要となるが、「お金」はモノを売り買いするためのツールに過ぎない、実際に「なんで働くのか」「なんのために働いているか」という視点から考えてほしいと会場に促した。

ある学生は、自身のアルバイト経験から、従業員同士で褒め合い、支え合うことのできる〈人間関係の良好な職場〉が理想であり、自身もそれを意識しながら働いているという。幾田氏が、例えば、職場の人がLGBTQの人に対する偏見・差別発言を言っていたらどうするかとたずねると、その学生は「何故この多様性の時代にそう思うのかと問い返す」と答えた。ほかの学生は、差別や偏見に対して自身は強く批判はできないが、「自分は違和感がない」ということを伝えたい、と答えた。幾田氏は両者の対応は、それぞれ別の形で相手の心に響くだろうと評価した。

また、幾田氏は統計では、男性の自殺率が女性に比べて2.1倍高いことをあげて、男性として生きていて「大変」「つらい」と感じる経験はあったか?と会場に問いかけた。

学生のひとは、年齢を重ねて後輩ができると「わからない」と言いづらくなると思うが、そこには教養主義やエリート意識などの男性社会で育まれた思想が原因であると述べた。その上で、ジェンダー平等を推進するために、男女平等を前提とした啓蒙をいかに捉えるべきか、と質問した。幾田氏は、啓蒙という点について、自身の小学校における講演の体験談を紹介して、ルールに捉われるのではなく、自由で平等だということを教えることの重要性を述べた。生きるということを「大変」と考えないように、また、「働く」ということは「生きる」ということであるから、自分の幸せに注力するように、と語る。

また、「働く」とは、「会社に勤める」ということに限らず、「生きるためにどう働くか」ということで

あると幾田氏は述べる。若いころに様々な経験を積んで、歳を重ねて自身の働き方に納得がいった際に、「働く」ことの本質を各々が他者に伝えていくことができればよいと語る。

千々松氏は、学生も各々のアルバイト経験のなかで、自身でアルバイトを選択し、向き不向きを知って、つぎのステップに進んでいるとして、現在のアルバイトを選んだ理由を会場にたずねた。ある学生は、他者と関わるために様々なバイトをしたが、クレームを受けた際に、自身は他者と交流することよりも〈友好的なコミュニケーション〉をとることを望んでいることに気づき、そのようなコミュニケーションがとれる職場があれば理想であると語った。幾田氏もその意見に同調し、幾田氏の会社では、どのようなことでも話し合うようにしており、上下関係もなく、話し合いのなかで不穏な空気になっても、明るい雰囲気になるようなコミュニケーションを心掛けていることが紹介された。そして、幾田氏が主眼とする「平等」「成長」「社会貢献」というキーワードも、幾田氏自身が「楽しい」と感じなければ、社会貢献に行きつかないと語った。



ディスカッションの様子

また、業務がつかなくて退職した経験がある学生の話から、幾田氏は、給与をもらっていると、「我慢しなくてはいけない」「大人だから」ということに縛られてしまうとして、年齢に縛られないことの重要性が述べられた。ここで、ディスカッションのはじめに述べられた「わからない」ということについて立ち返り、「わからないということは、すごく知性的である」と自身の考えを述べた。勇気をだして「わからない」と言うことによって、言われた方も「わからない」と言うことへの抵抗がなくなり、その連鎖が「生きやすい社会」に繋がるという。この話しに対して、別の学生から、先輩が「わからない」と言っているところをみて安心した、という経験が述べられた。

他の学生は、友好的になるには〈友好的な環境〉が必要であり、そうした環境がない人には無理矢理にでもつくってあげることが必要であると述べた。さらに、LGBTQやジェンダー問題についても、他者の考えを強引に改めるのではなく、偏見や差別発言ができない環境づくりが大事であると主張した。これについて千々松氏は、社会に出ると納期に追われ、常に生産していかなければならない。そうすると、心の余裕がなくなり、いがみ合いなどが発生してしまう。しかし、「働くこと」の本質に立ち戻ると、大量消

費が進んでいくなかで、現在のスピードで生きていくことや、生産していくことが本当に必要かどうか考えたという。そこから、友好的になるには、「自分ができることは他者もできて当たり前だと思わないこと」とであると述べられた。



学生の意見を聴く千々松氏と幾田氏

また、ある学生は、考えることや知識の共有が広がることは、偏見や差別の問題などにも有効だという考えを述べた。現代では科学的にも男女二元論では語れないことが証明されているにもかかわらず、前時代の性別定義に基づいた社会が形成されている。そのような矛盾を知らない人が多いので、まずは性別がいかにか決定されるのかという知識を前提とすることで、ようやくマジョリティについて言及できるのではないかと述べた。幾田氏は、性別やコミュニティなどに所属、当てはめることは、一見すると分かりやすいが、それは誰がつくったルールなのか、と述べた。働いていると、生きることに忙しくなりがちだが、しかし、働きながら自分の時間をつくって本質に向き合ってもらいたい、そうすると、ルールというものがないことに気づき、気持ち楽になる。普通や性別などのない、単に人間という生物であるという認識で働くことが重要であるという。

とある学生は、「唯一無二」という言葉が好きであることを述べて、同じコミュニティのなかで熱量の高い人と行動することで自分にはないものをさがし、互いに「唯一無二」であることを認識したい、と述べた。また、理想の働き方として、「女性は強い」ということを自身で証明したいと語った。幾田氏は同学生に、働く場においては、互いに真剣になってしまい、気付くと主張のラリーになっている場面が多々あるが、そのような場面にどう対応するか、と問いかけた。その学生は、相手が本音で話せる場をつくり出すことに努めるという。幾田氏は、上辺だけを取り繕った議論をしていると、誠意が伝わらず、意見が対立して空気が悪くなることがあるが、働く上においては、本音で「良いものをつくろう」という気持ちで話すと、互いが理解しようと努めるようになると述べた。千々松氏も「本音で語ることは、本質的ですごくいいと

思う」と賛同した。

さらに、学生から両氏へ質問があがった。その学生は、卒業後は就職する予定であり、将来は昇進を希望している。しかし、女性は出産などで職場を離れることもあるため、自身のライフプランとの折り合いに悩んでいるという。幾田氏は、一般的には時間を費やした分だけ仕事は「うまくいく」と考えられており、企業では「お金をつくれる人」が「仕事のできる人」とであるとされることを述べた。しかし、「バランスが良く生きている人が一番美しい」と述べて、今後はバランスのよい人が評価され・結果を出せるような社会になっていく。「一番大事なのはバランスよく幸せに生きること」と幾田氏は主張した。また、生きる上で仕事に主軸を置きたい場合は、パートナーや友人などと助けあえる環境をつくることが重要であるとアドバイスを送った。

そして、両氏は、「一番伝えたかったこと」として、いまある「働く」という形や評価基準に捉われず、自分が幸せを感じる働き方をまわりと相談しながら行うことをあげた。その上で、他者の評価を気にするのではなく、自分の幸せに注力してほしいとまとめた。千々松氏は、自分を大切に、やりたいことを行い、それが結果的に他者にとっても、地球にとっても良いことであることが「矛盾のない仕事」となると述べた。幾田氏は、「ひとりひとりできることが唯一無二」とであると語った。作業が遅いが優しく気遣いのできる人が、周囲が疲れている時に周りを励ましたという事例をあげて、自分の長所を伸ばして、幸せな人生を歩んでいけるように、「唯一無二の存在になってください」とエールを送った。

最後に千々松氏から、自分が向いてないことを行うと「気付くと自分が嫌な奴になっている」と経験が語られた。その上で、自分は何が得意で、どのようなものだったら循環していくかを考えてほしい、とアドバイスが送られた。



ディスカッション後集合写真

(文責 ジェンダーと宗教研究センター)